

幼児期からの市民育成～子育て・幼児教育～



開催日時：5月14日（日）10:00-11:30

話題提供者：特定非営利活動法人 DAKKO 代表理事 横張寿希さん

参加人数：16名（運営含む）

趣旨説明

はじめに、企画者の小田切さんから趣旨説明がありました。現在、高校教員でもある小田切さんが今回の企画を立てた背景には、高校で学ぶ生徒たちがこれまで積み重ねてきた学びのプロセスに興味を湧いたこと、中でもその原点ともいえる幼児教育に特に興味を湧いたという話がなされました。その上で、J-CEFではこれまで学校教育や社会教育の企画は多くなされてきたが、家庭教育にも注目していく必要があるのではないか。さらには、ライフサイクルの中での乳幼児期の発達段階を市民育成の観点から捉え直していく必要があるのではないか、などの指摘がなされました。それらの趣旨説明を受けて、横張さんからの話題提供が始まりました。

話題提供

横張さんから、最初に DAKKO のプロジェクトである主権者教育と子育て支援の二軸についての説明がありました。その上で、横張さんが幼児保育に関わろうと思った背景でもある、デンマークの先進事例の紹介をしていただきました。デンマークの高い投票率の背景には幼児教育があるのではないかと、という問いが印象的でした。

最初にデンマークのデイケア法についての説明がありました。（デイケアは勉強をする以外の空間に関することを指すそうです。保育もデイケアの中に含まれます。）。その際に強調されていたのが、デイケアの存在意義は、民主主義を育てることにあるという点です。デンマークでは、保育施設は、そもそも民主主義を育てるための施設であり、保育士の最大の役割は民主主義を育てることであると説明がありました。

次に、このようなデイケアに関する施設で働くベタゴーという国家資格とその役割についての説明がなされました。ベタゴーは、保育園、幼稚園、学校、学童のすべてを担当するため、すべての発達段階に対して総合的に対応できるそうです。そして、ベタゴーの仕事の中で最も重要なのは、民主主義を育てることであり、自立した子どもを育てることです。そのため、子どもたちには自分と他人を比較しないで、「自分はこれをしたい」という個性を重視するように促している点が説明されました。このように、「いかに子どもたちの自己肯定感を高めるか」を重視した先に、デンマークのような政治参加に対する高い意識が芽生えて

くるのではないかと、という横張さんのご指摘がありました。

また、デンマークでは、「ペタゴ思想」が根底にあるので、各教育機関・関係者の連携がとりやすい点が挙げられていました。ペタゴによる教育支援の場では、何らかの教育プログラムを入れて子どもたちを育てるというよりも、民主主義のエッセンスになるような活動・対話を常に実施していくことにこそ意味がある、という話もなされていました。

後半には自己肯定感や非認知的能力の話に論点が進みました。0～3歳の時期は自己肯定感を育てることが重要となってきます。特に自己受容、自分の良いところと悪いところを含めて認められるかどうか、自分が生きる価値があるという感覚を持てるかどうかにつながり、最終的には、政治への関心にもつながっていく。親が愛着をもたないと、子どもの自立ができなくなるため、親による子どもへの愛着形成が重要となるという説明もありました。また、デンマークは、自己肯定感と並んで、非認知的能力の育成に力を入れているそうです。横張さんは、非認知的能力が勉強以外の社会教育や放課後などで身につく場合も多いと指摘しておられました。同時に、現状の日本では、こういった非認知的能力を育てるためのお金も時間も不足している点を課題として挙げ、横張さんの話題提供が終わりました。

意見交換

横張さんの話題提供の後、参加者からの質問や感想をもとに、意見交換を行ないました。以下のような質問や意見交換がなされました。

- ・たとえば、(幼児教育ではなく) 高校段階などだからこそ出来るアプローチはないか？
- ・日本の親とデンマークの親の違いはあるのか？
- ・(参加者が) それぞれの学校段階で働く中で、子どもの自己肯定感について感じることはあるか？
- ・幼児教育の段階で、日常的な対話以外で、自己決定を促すような取り組みがあるのか？
- ・日本だと、自分の長所を話すことに抵抗感が生じたり、自己肯定感が高いことがネガティブに思われてしまう場面もありうる気がするが、そのような状況の中で、どんな教育的アプローチがありうるか？
- ・子どもたちを育てる大人の自己肯定感や精神的な余裕を育むような成人教育の場が必要な気がする。

保育の場や、ペタゴの役割を学ぶことを通して、日本社会とデンマーク社会の比較をすることができました。

(主な運営スタッフ：小田切、別木、斉藤、古野、岡本、浜田 報告書作成：斉藤)